



八犬傳結局下編批評 上十

百八十四回
回外新筆述



特
門 4
番 600
卷 78

八犬傳結局下編拙評

百八十回上

熊谷が白石齋藤を俱してのるを告るは秋篠
ハミのさそを認番照文はさそやきさのり一四をそ
るての別行とふしるが合ぬん犬士等と白石
赤坂とて別あるぞハ何あつごまより一うば赤坂
犬士等より秋篠の別行をこそんといか又白石
赤坂ハ熊谷を俱して行あるは犬士等の上京はよ
とよといかあらんさを秋篠がさそとて別行
やぬしつごぬしり ○八犬士系赤坂ハ皆上洛

あのみ
定例
秋篠
書
い
初
い
如
依



例は大見
乃者感心

たえてり ○ 大炎皇をいふとて日、雲山雲山
名不曰跡をぬらうる、大うてえようかえくう
りそふもつ義ふ夫老後のそよきおと
いへりところを成さとりふー大徳もよ一休の
迹をらひて参拜、大が本多ももろえの自れお
まど次におまほが靈意さる有りうらうてお
のりもおもひ合ふれて一休ことよ目とるむ地を
るゆるも文中のよほひとらふべー ○ 林の中、秋深が
まもてまやく十個をふすほくおぼふれて室
町へはさるる、善高といふまおころうころう

脚の上を
よく心を用
いる洋の
精細知音
第一人者
これ外不
さし

あれどほきさくまてる子のよめよ乃びるる一ぬ
そえてつるよー ○ 八武士等道灌が参内の例
よそくがふぬ例、参入道が参内のる本傳、いあうが
まど傳中有、おの入道とてりの参内、人のよく知る
ところ、いふましくぬ例、君臣とも官職を辞して
お官とせらぬころも例のぬれなきうふ ○ 大の犬
禪師、わらうかく有べく八武士等官職はり、大の
僧侶、無くはあつた、意中あつておふハ、大のえよ
あり、まぬとせらう固禪、せらるべき、場よあらぶ
大ハ、祭とせらぬころも、勅額とて、信記とて、

是亦亦後と
照しとてまら

師の僧衣を賜りしる子孫福お城の勅使下向者
の榮壽と首尾して宿因の父母ハ子本傳の本
栞達結局光輝かやうう、大が例の出家形氣も
辨しとがうのといはるハもちろん場おがういよ
かううハあういさうハ國壽とせらるる本
このどぞをさく前よ百三三同のそいあういあう
大よ上洛僧官と誂がう本ことを自説してつひ
こよ結ぶるも精ぬし○富山の神号勅額
又いよくぬし伏姫の神なる勅額とまうでしる
まうでしる聖賢孫中よみちくあはるるうさういあ

評して痛
好く

ふがづん志えども其神ハ里見一家よとあう
のこ他よりあめよたご雲ある鬼こころよのいじ
るふく勅額神とてそ神社の宸翰の額とて
賜りしる里見の宗ハりふとそく神聖のこころ
これよまを宗あしじ大栞大栞小栞小栞本栞の
伏姫雲神大栞いふも結びの宗かやう精ぬし
○栞中ほ急せたまひるまうの文のこ
かかあぶきよハ者むらどハ大いさう僧臣とてう出
身とてさうまあう功名成とてを傷よてあ
そ又やうの宗とていふ一栞中よの宗とていふ

いんば柳營の見参ハ筆ととぶふくろ政えケ職
とちよめめつぐよま既よまの懸文ガのげりし
とらふづふやうなふこよとていふく教合やういふ政
えあふ必何ぞれかぞれるあふく又ふとと合まふぞ
ていあふぞるべー○金蓮寺の二條とて意外の天
奇めふふたふ地理とつがすうは屏風ハ木るめと
くふるまふれど狩をぬのためちる木曾路その木者
路あは白石寺友ゆくうそハ大寺がのぼりの路
ゆきさるたあふとあふぞそよ大士の木曾めとハ
下漆とて有らるる精めし精筆ふふ○局平てふ者と

奇よかふくろせうとハこ外の奇めくふ小館あふと
肩よまふくろ何とせん用あふめけバ千ヨト眼ハ付
とといふふ其おあんとハとらるるまき走りあふと
て大塚を回いせとあふ信乃よりとせづよみえ眼よ
何事ぞとらふらん住ねとあふとと先ふとて其人
ハ知くろれど狩そのやうハとらるるさう画とるるぞ
次丁よりてやうやくは其奇を知らるるよあふとと大可
ハ鑿合せめめらるまことよ奇くぬ感ふと感ふし
○信乃よりいふき昨夜の靈夢タもらん此合ふ
あふととて説きし知せざらしハ例の大士の海

此の原簿本
精かきつて

ところ今蓮寺の故迹をらんとしてるるが其地を
掘りてハ必きようてんぐまのなるのむねは
いふまじやういふまじやうと人ハ説がむい喜の中
ゆるいあぬが狂言をさうさう文面ハそこまごころ
とよむまじやういふまじやうと文外餘情あがむ深うりぬ又
やうてハあゝぬるやんど易事か父ハ是非ハとて
追服やうと人こころを言ふらうと語り言の二轉
ある指華庵とて手束がぬ法ハ送書と持する
一老僕の追服やうといひは是非ハとてなるよ
合紋の精ハいふまじやういふまじやうと忠僕

子と物に使者
尊を敬て并
應目心

るよその姓名も知らぬらう子又篤実の局年あり
ことも又結局中に入りしるハ忠者の餘慶といはん
○信乃勅額の憚改葬三日の忌といひ諸大さへ
大き照文断じてこそ我ハ勅額をもちて旅在よあ
らんややくといひ精家といひ例の正大堅鞆敷服
けのふく信乃がさきとてさうとてさう旅在いさうせ
我のみ局年といふ人よと寺は入る又住持が將軍
家よ憚りやうあうと既二年とて三代よあんだ
ふと例が事このとまじやう威心いふそふ
をむきまうて法けくるがふいふるりあうらんと

二反の改葬他
者むね程の
不祥を好か
音の力のあ
まの純のま
の好祥あり
二守の的中
りて妙

不作多端やぶまといふはせむと事者ふいそ
このたのもしきなりとてかこつてハ例の文上の
評界して大法會の莊嚴光景と目つてみる上
又其不作共と目あぶらぬらんハ餘り上
香臭まよるべくいなす者くらぶき草葦の
ぬ下やしてまう一かれをみよとてかぬあふ
の改葬おぬしてお解お重らざる腹痛さ
やくの深く微ぬきぬくふとあふいびと
とて感心感服し○大が經声の清亮は衆僧
驚きまよる色あるがふ雜群は仙鶴あふくさ

かろんせとさうづ何ぞうのるまにあめやうな
ぬそとさうづそのやうとの眼お紙上あるが如きのぬ
やうのさうづまよる信乃が住持は同行の人教を
いふはぬなぶらとの大禪師と既ニ先せんあふ
住持あつびは衆僧等いまだかを知りたよ
つこの官僧とのあひし居らるまよるそのぬ
音よとておぬまほらんがふとららそねま
つぎの言毛光繁然いよく神僧くる信服して
逗留の結縁とよるびあるとせらるなごのつぶの
いんぐわゆるらうざぬあふらよあいてはきて大

が花丈士の上よありていひまきし。前よ景西かげにしの會
よハしほほのるハまうしやうよあはれめしてこも
也金蓮寺の山尊さんそん重信ちかひ殿と又、大が本ほんの
一花を昏也しあぶし。○住持ぢゆうぢの導師だうしのるを、大
よらぶるくぶ其場のれのことハ入るべきまあじ但一
禪師ぜんじのよとほよあはれめしてこも其場のいひ
ふしき禁し禪師ぜんじのるハあまうしやうあくたがめは
信力が昔であるハふとこもて今もそのまじりてい
といひとくべきるハ今も其は誰もそのまじりてい
あしんよと必かならずあはれめして其場のいひふしよふたがま

ありかまは是あねの文面の起おこ結むすあしんやまが
はあそとち頭かしら体たい文ぶんのころしおろのやうハ大の
ハ大なるをあしんよとこもて衆僧しゆそうと共ともに寫かま
ほらうらもやあぞとて文中ぶんちゆうと文外ぶんがいとあはれで
いさしあはらう。右殿みぎだんよあはれめしてこも
そのこびとも其場のれのみあじ次つぎは兩日りうじつの導師だうし
とつふハいよく一ひと刻こく遊ゆうあぶし。也金蓮寺きんれんじの一ひと條
感かん服ふくやうのまよ也何なにしあはれめ住持ぢゆうぢのるのこ
までもかの坊主ぼくしゆが悟ごらんハあはれめしてこもあはれ
らうよて何なにのめしあはれめしてこもあはれめしてこも

不圖の死を
らく一谷傲軍記
と云淨海理本
不殺盛の幽天
あるく石塔を
石工能て能ら
まある目見え
彼淨海理を
さる者直作の
刃止る小似方と
り人致ゆまを
ゆこの異同を
然る今もを段
んとよも時の和
より和向せとり
久まの教合
直しからまの
反示をすふ
とてこに詳
るの程あり

もは愛小心の
かに教和も
子の同から
いはま致ゆま
中と名の言
反て悪も小福

面談とていふ局平とていふくまづなむいふるが
きこる必はいふるなむいふのおもちんむいふ
いづれもいふるいふるいふるいふるいふる
くまづとて忠魂の来りていふるいふるいふる
て今引するいふるいふるいふるいふるいふる
をいふるいふるいふるいふるいふるいふる
べきいふるいふるいふるいふるいふるいふる
をいふるいふるいふるいふるいふるいふる
めぬまゝいふるいふるいふるいふるいふるいふる
二公子の短刀をいひ祖父の軀をいひおとす

るの短刀をいひ祖父の軀をいひおとす
短文のいひけるよていふはそいふるいふる
いふるいふるいふるいふるいふるいふる
そ故ありて我いふるいふるいふるいふる
層とていふる異語中よは詳と異語ありあむいふる
る系大父より傳來のいふるいふるいふるいふる
故ハ異語とていふるいふるいふるいふるいふる
語もいふる其いふる者官よ語るいふる異語いふる
かくいふる諸大い語るいふる文上詳異語いふる
あむいふるいふるいふるいふるいふるいふる

節がき毛那がきとありち自評自解ありよ
又何とら贅言と云へま墓石のそのあしと遺
骨の奇よあて改葬と云ふとゆると云ふと
又そのゆりづきと同一と云ふ是と又正対し
しと云ふと云ふと云ふと云ふの奇よと対
せぬしと云ふと正対と云ふと其奇よあきと
かんと云ふと事と云ふと云ふと云ふと云ふ
うよと云ふと奇対と云ふと云ふと云ふと
を仮しとのゆといひし大山まことと千慮の
矢さるば大坂が解と戯言と云ふと云ふと云ふ

中矢の上と下と
下れぬぬ神大
士の存下大忠臣
書き進言能

自笑掛念せざる例の快人なるふらと云ふと奇
ぬ奇絶対○近海事と大小と云ふと云ふと
よせめて此結局上下結と云ふと云ふと云ふ
今も精とぬと今も云ふと云ふと云ふと云ふ
蓮寺の一大奇結と緒の又緒結ぬの又結と二
輯二公子垂井の二條と云ふと云ふと云ふと
端結城義秋の居と云ふと云ふと云ふと云ふ
公子のする下と云ふと云ふと云ふと云ふ
二公子の傳と云ふと云ふと云ふと云ふと其
子よ番作忠なると云ふと英士ハ信力と云ふと

めの土垂として因^ひとひるまらひ^ひ実^は奇絶の土
垂^こかま^ば二輯^垂井の條^は及^垂錫の弦^びと大塚の
土垂^ともて既^は其^用とみ^ふん^ば其^結び^の又^有づ
しと^ハお^かだ^らう^しを^まで^おひ^しけ^らう^まあ^れ
の^こあ^じお^そく^ハ誰^と回^らま^るあ^らべ^しと^るは
こ^もや^ハ大^奇結^と外^とと^外と^あら^うぬ^とま^りぬ^し
其^弦ひ^ある^まよう^て今^つら^くお^ひん^んの^ハ二^公子
か^こも^て結^城居^城の^下る^ハ是^邊金^蓮寺^に
お^そも^ハ実^録の^表し^て子^おあ^らざ^れど^拍華^庵
の^首級^忠孝^士二^時の^志に^成し^ぬど^ハ安^葬の^地

といひごとく一季^基の^送舟^に近^中寺^は改^葬
て^築ま^らう^とい^はる^本傳^はあ^らは^しめ^られ^しと^ら
お^そも^ハ其^本傳^にお^きて^いふ^まは^らぬ^と其^本傳^に
の^義死^の本^も二^公子^の首^級あ^らび^し忠^士の^首の^人
あ^らぬ^山寺^は一^里も^りあ^らぬ^本傳^にて^二つ^の送
儀^もあ^らぬ^とい^はる^と里^もあ^らぬ^とい^はる^と
も^あら^ぬと^いは^る信^乃が^あら^ぬと^いは^るに^はら^ぬ
セ^バお^のづ^かり^ハ里^もあ^らぬ^とい^はる^とあ^らぬ^と
信^乃は^あら^ぬと^いは^るに^ハや^みあ^らぬ^とい^はる^と
あ^らぬ^とい^はる^とい^はる^とい^はる^とい^はる^と

精々細々詳
しめて抄

おしでわの首筋を埋みらるゝひとつんくもの殿は
金蓮寺の娘結あはぶそのつぎ必をまひさむびと
有べきとぞハもろんぢあぶしとよ又二轉の昔
いよくおもひあはれて信乃をうさよ者官日あ
しとぞろは懐旧の情くぐくくそよそともをや
こ外ハあらざれどたよと曰くこ外ぬ結よ
てハ有るる系○小庵客殿あらざれば天と自餘
の犬士寺ハ庵の椽又ハ外面あるまゝとや
夫役寺ハちぢあやう紫門外ハいこひて居るこ
まもとらんぬるぢれど勅額の長楹と眞坐の

寺門内ハ昇入ぐくぐるこよこよこよこ
して自れよあはれてあり葉印紀二と葺長
楹とやとあはハえようぢれど於照文のたむ
向のあはせと後よの石を庭門より入てつよ
やや何とらん照文ハとぢの門外ハあつて例の
勅額とやと居る飲のやとあり大小こそ
あれあつてするめはまきゆえりよこよこ
まどつて自れよあはせとよハあつて
ことよつんハうがらよとてつんかとまれか
とらもわらとてまてつんかよ中てつんか

是ハ鑿評
假テハ眞と處
正ハ似と

後條は自注よつて有なれば今とていふも
つとてとがましくなれど村雨と稱せざして祖傳明
の名刀をいへる天の配割と志あるる筆の配割
ぬこいふと威服せり村雨と成成はまゝのやと父志
とをさして信が信ある園目編中よあつても又
一園自だいのりしそは十家ていふと居はがし
あつて名刀園弱の家は埋れぬ大士の腰のあまた
るがあんぼくをさして今家傳の名刀の依
をいへるよるこびりよるハたぐと教まが志
書は二足が一足こと又二振とまゝに二振一振とん

と二振をいへる妙筆妙配割一文筆の短刀と
三輯と出てもいへるで大刀も出家傳名刀具足
てふといふ大振が重代とふも又ねね
糸かきりて結ぬるの一事結ぬる○井氏の
香筆料と庵主よ又守墨料と局平よとぬる
例のさきとけつとあかの傳真が真なるもの
一と曰はさきとけつと又いへる二輯とけつ
く一ふんバ番作が庵と燈はさきふん
としありいふものほえふりあつていふべ
言ひのぬの一はのいさほひとしとていふべ

もあらんうづらうかふるも庵のちるぬを
現におぼくするえりり○諸大士かめく其父母
祖先兄弟の墓をいふみ又ゆきとましくその
後流を誦めいひよひのちをいふちかひいひ
息子の一人の行王の本をいひいひかひ結ひだ
ておぼくおぼくおぼくおぼくおぼくおぼく
まゐりておぼくおぼくおぼくおぼくおぼく
とふひいひいひおぼくおぼくおぼくおぼく
とふひいひいひおぼくおぼくおぼくおぼく
たふひいひいひおぼくおぼくおぼくおぼく

公家初命外頭
のまゐりておぼく
心も時をわす
又孝嗣の何ぞ
吉く八記を傳
堂社建立の孝
嗣の代もいふ
是を新さんめ
文りと云孝嗣
大士小あらる故
いふく創頭小堂
らるる

まを孝嗣よ告とあつせど其おのづから知るよまら
やし毛おぼくおぼくおぼくおぼくおぼくおぼく
ひあおぼくおぼくおぼくおぼくおぼくおぼく
ん信なる間ておぼくおぼくおぼくおぼくおぼく
をそらよ首のくおぼくおぼくおぼくおぼくおぼく
あぶ一孝嗣が感佩恭敬いづれよとまらあるべ
まらるもおぼくおぼくおぼくおぼくおぼくおぼく
○歸厚の水陸惣文例のたいとまらるる
がゆひいづも道宗が株おぼくおぼくおぼくおぼく
あぶ一いさくらのおぼくおぼくおぼくおぼくおぼく

平くくもひそくつんひひけらるゝとくはめくうも
自注の半十すきふちのめい評中し和口まひとせ
とらふんぐふちく何とらふんふちや如く教養
教服

百八十回中

八武士四二家老二家老正木大全とらふり
壁八木八又妙真寺の田女二幼童といふや賞
祿のそんといふといふまをけるといふや九ざ
と子推のこみあふく丁癩の議さあざま
ことよあまふまご君國よみふ十歳といひひめ

大士かそハ臣なぶご因ともつてふんが連枝門葉
近しくハ本傳のあぶり里又家よあきてお上
あるぐぞとふれご又家老ハ家老大士といふご又
みらよ家老の職をとおるべりしまでハ二家老の
次席こよ城主とて上大夫采邑二家老よ一倍
やといふかし里見よお上なきハ大士のとらふんご
狂あつらふハ大士ハ大士家老ハ家老其位と其
職とよお合のあふるやりふくしてめし大全の
まふしちちらんふご又おし大田本のら頭孫ちる
いふとそハ大士の埜地采邑云々をいふとて安

あらるべき

初て尖士の領地は
強て説をせよと
その難評ゆかり
いふ下なりしむら
い評るにありてお
くやうに記す

次國大の権後の
長君を三の今
の江戸から名主
の類を推町人
かたしと思へり
取一ゆきなる
ありありと長
奇の地役人の

町人のあり其新
かりし一層名主
刀の免小しき人
利町人

町置をらむぬごぶのべーかろべー五十名大素
吉ふもそ士はあそこのまばらあれどそのめ
ことおのつらうらぬらありらういりて
必からでもなぶらぶらふ士よりそとあまご
あのかせとの居ありて庶字系刀月俸とて
あつた其役とつとむのそ終令のそ力技お人
あとの如らん四個の町人ともは次國大はは後長と
してありくもやうちぐるらふとかぞへまぎれらも
らるそと有べー紀二を照文が養副ぬとを男
照文が物ちうらうハ百二十九回京都の條に代四郎と

ものごらうかめらの穂北まきよの使役姓名とて
あそち其よりそ法會の施行方ハ氣布までとて
別におありさうそあつた一個のそ堂その先兵を
そ外いんぐ奇ぬよありこませとせいの念よとて
あやらくつらぬらふらそのそ念のそ人の素姓
があぬし例のそと又そ外ぬ烈譜と其ぬをのこ
あまひよこそよ其系譜をとらて此堂等の養副
十二郎照章と真字金將は弦がらふま伏線よそ
有りりとハ係なぐら深めそその伏線とそ心と
つらぬと念のぬは堂に長よそハまきわがらふら

合せてとて年の必すその節よあはるべしと
あはひしうりおそくしぬとさうわらひつばいふ
らんをとおき繩こそつたよと外あれことよととづと
妹の親き信いと妹の小文吾ハと外中の又と外
たり 配偶人倫の大事など有べきところとの
顛倒まゝ強ひつての縁結びふどたぶと外よ
あゝの奇めのためのもよ目をらんやとがかの義成が
天縁あつとやといふところのさうさう天縁よまら
さるよと本据つがよせられあゝ胆老の赤繩つふぐ
はハ雙言敵とて夫婦とあゝ人間の赤繩こそとふ

ひき定むるふれ月老のハとやくつのはほどよつ
あぎをてつんなどバその赤繩よ年の多めとつふ
づまうん狽交き居はとよその一辞あり又かくよ
そのつゆしほり元来の年ハいま三三三三三三三三三三
ハ神三月のきりありて三三三三三三三三三三三三三三三三
子よ三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三
ぬゆとこの一辞かくのさうおき信の親き信とるわ
と目をてつりさう目をとてハ又妹と妹とつと
目をよハいろと赤よとハふつと其外よとをさうとて三三三三
年かきとせとてハあゝとるいまほひしち奇配が天縁

詩曰園雕ハ樂ん
て不慍
色情と交へ
評せらるるハ

のよらて定らるるころとふざー（うらまへ）のみにとを
天縁のぬちたふざれば小文昔いろと妹の又一奇は
アコぶ天縁の赤繩ぬちたふざー（うらまへ）又ととく
たふざればとんハ妹義成の娘吾勝のふかの聲てし
賢（けん）鏡（か）るるまきふまぎでなしいでりハ大士の美醜を
かちとん大士もとるる醜男あつととるるおとあま
安房入（あ）馬（ま）上（う）まて終（は）るるホ又ととるる
居あつびるるるを白ちるあり黒まありさ
でとこの男がうの口もハえよりそめくあつてあり
あつてあつてきこつてぬくまらととるるあつて

作者の不安意の
ミからるハ目の
眼連も迷まする
へ

くもまづハ大士もてとらると美男もとくハ白まじ
すると天縁もまらとらハ父元のいろも如く年（とし）
のこあつと男がうよと些（ち）の過（と）不（ふ）な（な）あつととと（と）
く評へ誰とらあつてみんそと又天縁の赤繩のぬち
るところをたふざわえおの婦女子ころとあつて
美醜をみづるよ評さるるやなれ○ハ妹ハ（い）中（ちゆう）
ハ士ハ二老よ引とて貞夫と表の間は居ふざら
山（やま）雞（けい）の間まづあつてまきあつハ士もハ行のあつて
つねに好男子ふあつてまらふらふらぐくは好男
子二人三人あつてハ人そらひて整（とと）と大士といと

ふんはを飾るひつるのびらとよはてなむえぬ
かせざうてころ氷解よらうごうよのつひつえ
やさま近くよあててころよ遠く又かきうあるは徳
せぬころよあてぬころのあぢきむよわらうとぬし誰
さともあつるよとてハ義成を揮のぬのかむそー○
例の智玉ハがふ大々よあむむしほるべく信乃大角が
云ハ首官は事知のさちふがうころよ必也言ど
そくバ者べくたて必のさハ必もれなきうふ○まう
やのうぐれを大全よめあせさるそめし奇しめし
ハ大士八姫の配偶ハあしつる本傳の一圓目首官のこ

ころ定めあつるころハ配偶ハ圓目のるよあしつる
わらうんむねハ首官いごむむむよるべきまき巻
端ハ老女等が此珠の婚嫁を乞ヤしころむとき人
ハさくころも此偶をむむむとくころも有なきや
めどかきあめのとよハ一のハ姫婚嫁のせづりあるの
ぬをすーまててを珠の配といふよもそころハさ
よかふころまきまふあてざうしよころよいころてくふぞ
ころめてふそよがふこれよめ老女が房紋の城
主の子息よとむむころさあそころ大田本の傳と年
まともやうつがふよまき文貌おむあ家まころよ

恩命かぐりふくよんそまき督姫きぬく大金の亞
大土ふるん今さうしつとまーかづて其あつまのあめ
ねせぬが義成がねよ同じく八郎よあつて九味とつふ
べー亞大まき亞女よのうとむとびた負外あつとの
一級のたぐひのそと亞大まありて亞女あつそとま
天縁名証暇念是又同じくかぬよようて知るぬが
そハ解ならうて自我上とるうり此督姫のあつて
あつてのうとてハ本負のねのこへよとんが
とつてはにけまきとつてあつてのうとつてねこ
大坂大川の姫姑ハ城地の方南の便ぶふとあつた

○例の道節は祭言あつてあつて此亦ハ信隆とつて
らよせぬふつらでのあつてはけつていふまてを
此くやものあつて洲等とつて上縁の田地ハ渡
し舟はらうらふとつてあつてあつて其時はいと
ぶうくつていふとつてあつてあつていふとつて
杖葉はとつて本條の姉結ハ眼ハ心ハいふあつて
まはあつていふとつていふとつていふとつていふ
他ハ一節の豪傑ハ一結とつていふとつていふとつて
がくとぬくうらうらあつてあつていふとつていふ
若者のぬくぬきハきまていふとつていふとつていふ

多るはえくうて然しき福井城とて一面は二人が
目ごのつとまきより其一面とせりて又さうあつて
人とあつていぬるよお金とあつて筆うごめ
つとまきとつと感かぬ我のよまむ存別が人の
るぢれど存別一人とつとえあつてうらむ奇事
は証見の人とつとあつて誰とてかぶれど
信隆とせぬハ信隆のためはあつていほると
あつてはくちもあつて自然とて旧領よりと
つとまきとつと下候とつとみえども旧領よりと
る千代丸とつとあつてとつと大に異しくさうあつ

つとまきとつと感かぬ我のよまむ存別が人の
るぢれど存別一人とつとえあつてうらむ奇事
は証見の人とつとあつて誰とてかぶれど
信隆とせぬハ信隆のためはあつていほると
あつてはくちもあつて自然とて旧領よりと
つとまきとつと下候とつとみえども旧領よりと
る千代丸とつとあつてとつと大に異しくさうあつ
つとまきとつと感かぬ我のよまむ存別が人の
るぢれど存別一人とつとえあつてうらむ奇事
は証見の人とつとあつて誰とてかぶれど
信隆とせぬハ信隆のためはあつていほると
あつてはくちもあつて自然とて旧領よりと
つとまきとつと下候とつとみえども旧領よりと
る千代丸とつとあつてとつと大に異しくさうあつ

寺ハ遠く結城法會近命寺改葬し討し此金大寺

此の言ハ詳ニ
お家の門外
詳ニ記述ス
合ハシメテ
再思ハラセ
ル

芝がくくろくろくよぶひきりといふらんやるハかの政本
老狐託あり升天する乃びて春副ノ秘訣をつ
げ三年の後云々のせし石降して形はるまは
似たりとんむふが成る果と知つたまへといひこれ
託ありほびの霊狐たんばふがをさうを知らて
くのでとらへかくとさうたさうを狐託数つ
きて命をとりよ乃び必ざるもあらんとてひてふ
ちうらうらふべうらうらと雲霧の舞よとてふら
ふらんとしてハ狐託霊をその言むふらまは似
たり理論ハ理論本傳ハ種々奇異ハ昏らふて有

其自解詳ニ
希の門外
村の心狐託の
遺言ハ狐託の
あらうとを在り
出でるを歸ま
是化の神史ハ
いひたるを在り

あらば終に狐託石と奇のまうらうしてお言と合
てあらまほしきやんふらびおあふは著者おい
るののふらふらまのなげき傳中の奇異ハ演義
おらうの記述を界ヲ議論も又議論ハ化石の論を
くばるべきを既ハ大村ハ其論ありやうとていふ
を果しの奇異のためハ正論の理をまげらるべき
あつても理をまきとて奇論をつくらんら傳ハ曲亭
老人論ハ著作先生といふべきは伏狐外霊の
ことといふも義はの言は時として其意をまき
しつめざるはとらたて議論といふやあらうと

